

ピース

さようなら

春日信彦

不審者

今日も風来坊は春風に乗ってのんきに地球を観察している。確かにふうてんの寅さんのように仕事もせずに遊んでばかりで幸せそうに見られているが、本人は人間には理解できない重要な仕事をやっていると自負している。実のところ、地球の調和を凶る仕事をやっている自分勝手に思い込んでいるに過ぎないのだが。今朝も、根城の曾根から北上し二見ヶ浦の巡視に出かけた。この時、サーファーたちを見るたびに思うのだった。何が楽しくて板の上で踊るのか？なぜ、人間は奇妙な娯楽を好むのか？

福岡市と唐津市に挟まれた糸島市は、巷（ちまた）でいうド田舎だが、春の田舎は格別に気持ちがいい。桜のピンク、レンゲソウのワインレッド、菜の花のイエロー、目に優しく心を和ませてくれる。風来坊は早朝に1時間ほど糸島の北部を巡視して、糸島オリーブ園のすぐ近くにある50メートルほどの背丈を誇る鉄塔で休憩するのを日課としていた。休憩場所というのは、その鉄塔のてっぺん近くに工事作業のために作られた約1メートル幅の金網が敷かれた小さな足場スペース。知名度のある福岡タワーをまねてその鉄塔を勝手に伊都タワーと名付けている。

今日も、風来坊は伊都タワーにやってきたのだが、いつもの休憩場所に奇妙な動物の先着があった。このような経験は初めてであった。しかもその小さな休憩場所に身を縮めて寝転がっているのは、男女の区別がはっきりしない老人のようであった。ちょっと、気味が悪かったがいつものように、鉄柱にそっと舞い降りた。いったい、このけったいな老人は何者だろうと首をひねった。どうしてこんなところで老人が寝転がっているのか、ちょっと考えてみたがカラスの常識ではわかりかねた。

工事作業員がたまに鉄塔に登って来て、真剣な顔をしてせまっ苦しい作業場で何やら手足を動かしているのを見たことはあったが、彼らは、まだ顔に張りのあるいきのいい青年だった。ところが、目の前の休憩場所に寝転がっているのは、気を失っているような、熟睡しているかのような老人にしか見えなかった。人間とカラスの年齢は、異なるのだろうが、直感的に人間の年齢で80歳は超えているように見えた。半袖に半ズボンの小柄な老人が、作業用の小さな足場スペースに身を縮めて寝ころんで、いったい、何をやっているのか？

風来坊は夢でも見ているのかと思ったが、目の前には、顔が小さく白髪でショートヘアのジイ一のようなバアーのようなのが、寝ころんでいるのは確かだった。天賦の才に恵まれた風来坊は、人間のように学校に通ったことはなかったが、博学で人間についてもかなりの知識を持っていた。鉄塔を登ってくるのは、工事作業員がほとんどで、一般の人が登ってくることはない。それは、非常に危険だからだ。その常識からすれば、今の目の前の現状は、常識に反していた。風来坊は、老人の作業員かとも思ってはみたが、あまりにも痩せこけてひ弱過ぎる。また、気絶したかのように寝転がっているのはなぜか？そのことを考えると、やはり、作業員ではないように思えた。

絶景の眺望を求めて一般人でもここまで登ってくることは可能だろう。でも、80歳を超えていると思われる小柄で痩せこけた老人が、50メートルほどの高さまで自力で登ってきたと思うと人間の精神力に感心した。それにしても、こんな高さまで登って、怖くなかったのだろうか。バアさんであれば、信じられないことだ。しばらく、しわだらけの寝顔を感じて眺めていたが、寝ぼけて転落しないか心配になった。万が一のこともあると不安に思った風来坊は、ちょっと声をかけて起こしてやることにした。「おい、ちょっと、こんなところで寝るんじゃない。落ちたら、一巻の終わりだぞ。おい、早く起きるんだ」

風来坊は、怒鳴るほどの大きな声で老人に声をかけたが、全く反応がなかった。このまま放って置いたからといって必ずしも転落するとは限らないと思ったが、やはり、心配になった。大声で起こしても起きないのならば、頭をくちばしでつついて起こしてやる以外に方法がないように思えた。でも、びっくりして飛び起きて、鉄枠の間から滑り落ちて頭から真っ逆さまに転落されても困る。起こしてあげたこっちが、過失致死に問われる。風来坊はちょっと躊躇してしまった。

しばらく考えたあげく、びっくりさせないように、くちばしの先でほほをゆっくりかいてみることにした。鉄枠からヒョイと老人の左肩に飛び乗った風来坊は、寝顔の左ほほを直線を引くようにくちばしの先で2, 3度ひっかいた。そして、耳元で声をかけた。「起きるんだ。こんなところで寝るんじゃない。落ちたらどうするんだ。早く、起きろ。起きろ」声をかけては、くちばしの先で頬や額をひっかいたが一向に目を覚ます気配は見られなかった。

大声を出してもくちばしでひっかいても起きないところを見ると、このまま後1, 2時間は起きそうにないように思えた。このままぐっすり寝かせておけば、いずれ目が覚めて無事に降りて帰るようにも思え始めた。余計なおせっかいはやめて、小柄な老人をこのまま寝かせて、鉄塔の南側に見えている雷山（らいざん）別荘に行ってみることにした。そこには、ゴルフが趣味の主人と同居しているマンチカンの丸顔ピエロがいた。ピエロは美意識過剰のピースと違って気取ったところがなく、気心が知れていた。

突然、飛び起きた老人が、杵から転げ落ち、眼下の竹林に墜落しないかとの一抹の不安はあったが、心配ばかりしていてもどうすることもできないと思いパタパタと飛び立った。飛び立つとすぐに老人に振り向き一瞥（いちべつ）したが、やはり、目をしっかり閉じてぐっすり寝入っていた。糸島オリーブ園の上空を過ぎ去り、時計回りに巡視を兼ねて迂回していくことにした。平原歴史公園西側上空を通過し、南東に向かい観光客でにぎわっているファームパーク伊都国上空を通過した。そこから南方面に見える雷山ふもとの色とりどりの別荘を目指し、のんきに北風に乗って流されているとほどなくして雷山別荘に到着した。

疑惑

ピエロの別荘は雷山ゴルフ場の10番ホールの上空にある。たまに、ベランダのテーブルの上で無防備に寝転がって、日向ぼっこをしているピエロを発見することがある。風来坊は、ゴルフ場に到着するとコースを反時計回りに大きく一周巡視するのだったが、ゴルフボールを持ち逃げされた恨みなのか、目を吊り上げてにらみつけるプレーヤーがたまにいた。今日も2番ホールの上空に差し掛かると「コラー、撃ち落としてやる」とわめきたてたおっさんがいた。もっとも、ゴルフボールとやらが、高級品ならば、怒り狂うのも無理はないのだが。

確かに、カラスの仲間には、ゴルフボールをくわえて逃げ去る輩もいるが、別に悪気はない。単なる知的好奇心からくる遊びに過ぎない。風来坊にしても別に悪気があって飛んで来るゴルフボールをキャッチするのではない。飛んできたゴルフボールをキャッチするのが得意なだけだ。むしろ、ナイスキャッチと拍手をいただきたいくらいだと思っている。問題は、言語の相違のため、人鳥友好条約が結べないことだ。

確かに、人間はカラス並みに賢い。でも、カラスと違って、人間はいろんな遊びを考え出す。自由に遊ぶことは、認めよう。多少の自然破壊も多めに見よう。ならば、カラスが遊ぶことも認めなければなるまい。人間だけがボール打ちを楽しんで、カラスのボール拾いを非難しては、自然の摂理に反するのではないか。風来坊にも人間には理解しがたい言い分があって、当分ボールキャッチ遊びをやめる気はない。ゴルフ場を周遊しては、2, 3個は飛んできたゴルフボールをナイスキャッチして、池にポトンと落とす。その時、クラブとやらを振り回す狂人がいるが、風来坊は意に介しない。

10番ホールの上空にやってきた風来坊は、黄色いテーブルが置かれたベランダに目をやった。テーブルの上には真珠色の猫が気持ちよさそうに仰向けになり万歳して寝ころんでいた。あのみっともない寝相は、まぎれもなくピエロ。風来坊は、ピエロを起こさないようにそっとベランダの手すりに舞い降りた。鉄塔の老人のようにぐっすり寝込んでいるようで、全く微動だにしない。猫は長い間人間と暮らしていたために、彼らに感化され、本来野生動物に備わっているはずの警戒心、さらに俊敏さまでもが退化してしまったようだ。

しばらくピエロを眺めていたが、全く起きる気配がない。あの得体のしれない老人と同じだ。「おい、もうそろそろ目を覚ましてもいいんじゃないか。タヌキ寝入りだろ。お前さんは、ネコなんだぞ。タヌキじゃないんだ。まったく、その寝相は何とかならんのか。みっともないったら、ありやしない。ネコの威厳ってものが全くない」ピエロのしっぽが左右に動くと、左目がかすかに開いた。

大の字のピエロはニャ～と一声だすとくるりと回転し身を起こした。「何だ、タヌキ寝入りだど。俺はぐっすり寝てたんだ。カラスと違って、ネコは毎日人間のご機嫌を取って、気疲れしてるんだ。風来坊にはわかるまいがね。空を飛べるカラスがうらやましいよ。ところで、何か面白い話でも持ってきたのか？」話し終えたピエロは、右手でお尻をゴシゴシとひっかいた。気疲れしているという割には、贅沢三昧をしているように見受けられた。最近、栄養過多なのかかなりふくよかになった。

「へ～、気疲れね～、その割には、モフモフしてるじゃないか。贅沢しすぎじゃないのか。あまり、うまいものを食べすぎると、糖尿病になるぞ。気をつけたほうがいいんじゃないか」気にしていることを指摘され、しかめっ面になったピエロは、大きく背伸びした。「いつてくれるじゃないか。まあ、そのことは、もつともだ。最近、ちょっと気が緩んで、食べすぎているようだ。気をつけんな。それより、面白い話はないのか？」ニコツと笑顔を作った風来坊は、くちばしを上下に動かした。

「それがだ～、面白いというか、奇妙というか、非常識というか、全く理解しがたい現実に、今しがた直面した」両耳をピクピクと振るわせ顔を引き締めたピエロは、風来坊を見つめて話を促した。「なになに、面白そうな話じゃないか。どんな話だ」腕を組んだ風来坊は、ウ～～と一つうなって話し始めた。「今朝のことだ。俺が二見ヶ浦一帯を巡視して、いつもの休憩場所の伊都タワーにやってくるとだ、先着がいたんだ。その先着というのが、どうも、よぼよぼの老人のようなんだ。こんなことって、初めてだ」

真剣なまなざしでピカピカと瞳を輝かせたピエロも腕組みをして、ウ〜〜とうなった。「それは、奇妙な事件だ。本来、人間は臆病と決まっている。ましてや、老人が鉄塔に登るってことはあり得ることじゃない。うちの主人なんか高所恐怖症らしく、屋根に上っただけでも足がすくむとっていた。一度観覧車に乗って、眼下のアリのような小さな人間を見たとたん気を失ったと言っていた。きっと、見間違いだ。その奇妙な動物は、ウラウータンじゃないのか？」そういわれると風来坊も自分の記憶に自信がなくなってきた。

しばらく自分の記憶を確かめていたが、やはり人間のようにオラウータンではないように思えた。首を傾げた風来坊は、まん丸い目を大きく見開き返事した。「いや、老人に違いない。小柄でやせ細っていたが、白っぽい半袖のポロシャツに、ネズミ色の半ズボンをはいていた。服を着る動物は、人間だけと認知している。オラウータンであれば、全身毛むくじゃらじゃないのか。やっぱ、あれは、人間だ」コクンコクンとうなずいていたピエロだったが、疑問点を投げかけた。

「確かに、人間は服を着て、オラウータンは毛むくじゃらに違いない。でも、最近のイヌやネコは、人間並みに服を着せられる。隣のエリザベスというネコは、毎日、派手な服を着せられて散歩に出かけている。飼い主は会う人ごとに「かわいいでしょ、この子」といっては満面の笑顔で自慢しているそうだ。おそらく、その服を着た奇妙な動物は服を着せられたオラウータンに違いない。もう一度、間近に見つめるといい。きっと、顔に毛が生えているぞ」

しばらく記憶を再確認していた風来坊だったが、あの奇妙な動物が人間であれオラウータンであれ、勝手に登ってきて気ままに寝転がっているのだから、しばらくして目が覚めれば、勝手に降りていくに違いないと思った。それに、あの現象は、幻覚だったのかもしれないと思い、奇妙な動物についての話はやめることにした。突然、ピエロのお腹からグ〜〜という大きな音が飛び出した。ピエロは、朝食を済ませていなかった。主人の千春と孫の千夏は、朝早くから散歩を兼ねたランニングに出かけていた。キリンさんのように首を長くして、ピエロが二人を待っているといると玄関のほうからリリリ〜〜ンとドアが開く鈴の音が響いてきた。

時々、孫の千夏は土曜日の夕方に雷山別荘にやってくる。昨夜泊まった千夏は今朝早くに千春を起こしてランニングに出かけていた。おじいちゃんに影響された千夏は、5歳にしてプロゴルファーを目指していた。「ただいま～～。ピエロ、起きた～～」千夏のかわいい声がベランダまで響き渡ってきた。ニャ～ニャ～と返事すると千夏が元気よく駆け足でベランダに飛び込んできた。

テーブルの上で待っていたピエロに駆け寄ろうとした千夏だったが、手すりにちょこんと、とまっている白いハトに目が引き付けられた。一瞬立ち止まった千夏は、振り向いて千春に声をかけた。「おじいちゃん、白いハトがいるよ。早く、こっちに来て」千春はバスルームから返事した。「ちょっと待ってくれ、今シャワーだ。ハトちゃんに待ってくれるように言ってくれないか」

少し肥満でくちばしが大きい白いハトをじっと見つめていたが、ニャ～～という鳴き声を聞くとピエロにエサをやることを思い出した。「今すぐ持ってくるからね。ピエロ」やっと朝飯にありつけると思ったピエロはしっぽを大きく振って笑顔を風来坊に向けた。ハトと間違えられた風来坊は、カラスとばれないうちに飛び去ろうとした。その時、ピエロの呼び止める声を聞き、開き始めた翼を止めた。

「おい、もう帰るのか。まあ、たまにはいいじゃないか。千夏ちゃんは、いい子だぞ。カラスをハトと言ってくれたことだし。もう少し、遊んで行けよ」風来坊は、よく白いハトと間違えられる。白いハトと間違えられても別段構わないと思っているが、やはり、カラスはカラスであって、白いからといって決してカラスが突然ハトになることはない。時々、女子にちょっとこのハトって肥満じゃない、など言われるときがあるが、こんな時はかなり落ち込む。さらに、ハトにしてはブサイクね、とどめを刺されると地獄に突き落とされる思いになる。

千夏は朝ごはんが遅くなったとごめんなさいの気持ちからピエロ用の小皿に少し多めにキャットフードを入れた。お待ち同様～～と声をかけるとネコタワー横の定位置に小皿を置いた。目を輝かせたピエロは、ピョンとテーブルから飛び降りリビングのいつもの食事場所にかけていった。お座りをしたピエロは野良ネコのごとく餌にがつついた。ベランダの木枠にとまって、一心不乱にエサにがつつくピエロの姿を見ていた風来坊は、これぞ野性味にあふれたネコだ、と感心し力～と声を上げた。千夏は窓から見える青空に一瞬目をやった。ベランダには一羽の白いハトはいたが、青空のどこにもカラスの姿はなかった。

バスルームから出てきた千春は、キッチンで朝食の準備をしていた。ベテランのウェイターのような千春によって、トースト、マーマレード、目玉焼き、ハム、コーンスープ、プリン、ミルク、ガラスのボールにはリンゴ、バナナ、キーウイ、レタス、アスパラガス、セロリなどのサラダ、それらが手際よくリビングのテーブルに並べられた。ランニングでおなかをすかせた千夏は、コーンスープの香りでますます食欲がそそられた。「おじいちゃん、今日も、ごちそうね」

テーブルに着いた千春は両手を合わせた。「平和に感謝だ。千夏も平和な日本に感謝するんだ」両手を合わせた千夏は、じっと目を閉じ静かに気持ちを集中させた。そして、千春に教えられた神への感謝の言葉を心でつぶやいた。「神様、平和をありがとうございます。毎日、元気にご飯が食べられて幸せです。戦争で、ご飯が食べられず苦しんでいる子供たちに、神のご加護がありますように」千夏は、神への感謝を終えるとトーストに大好きなマーマレードを塗り始めた。

食事を終えたピエロは、忍者のごとく忍び足でヒョイヒョイとベランダにかけていった。そして、テーブルにヒョイと飛び乗り、右後ろ脚であごの下を気持ちよさそうにひっかいた。風来坊はお腹いっぱいになって能天気な笑顔のピエロに皮肉を言った。「おい、今日もうまいエサに与（あずか）れて、ありがとうございます、って神様に感謝を述べたか？全く、天下泰平（てんかたいへい）だな。空腹を満たせるということは、幸せということだ。いいご主人に巡り合えて、よかったな」

皮肉を言われたピエロは、左目を細目で、じろっとにらみつけた。胡坐（あぐら）をかいたピエロは、両手を両ひざにおいて落ち込んだ声で話し始めた。「そうか、幸せそうに見えるか。俺は、家出しようかと思っていたんだ。あの主人、一見、やさしそうに見えるが、エンマ大王のようなことを考えている。俺は、聞いてしまった。あ～～、俺の人生は終わりだ。家出するしかない」言い終えると頭を抱えてニャ～ニャ～と泣き始めた。

涙を流しているピエロを見て、風来坊はピョンとピエロの横に飛び降りた。涙を拭いてやりたかったが、カラスには羽しかなく、やむなく翼で頭をそっと撫でた。「おい、どうしたんだ。ガンにでもなったのか？手遅れだから、保健所に預けるとでも言われたのか？獣医学も進歩して、高度医療というのがあるらしい。あの主人は金持ちだ。きっと手術をしてくれるさ。主人を信用するんだ。人間は、本来残酷だが、やさしい人間もいる。そう気を落とすな。落ち込んでいると、ますます、具合が悪くなるぞ」

勝手な想像で機嫌をとった風来坊であったが、ピエロは全く元気を取り戻さなかった。ガクンと首を折ってうなだれてしまったピエロは、恥ずかしそうな表情を交えて、今にも息絶えるような声で話し始めた。「なんと云えばいいか。事情は俺にもよくわからないんだが、俺のタマタマが、抜き取られるかもしれないんだ。そうなったら、俺のオスとしての人生は終わりだ。死んだほうがましだ」

タマタマが抜き取られると聞いて、風来坊も顔を引きつらせた。確かに、ネコの繁殖を抑止するためにメスの避妊手術がなされていることは知っていた。さらに、オスの去勢をすれば、繁殖抑制効果は倍増するに違いない。とうとう、ネコの暗黒時代の到来か。カラスには関係ない話だが、なんだか、ピエロが可哀そうになってきた。タマタマを抜き取られてしまえば、キモいオカマピエロになってしまうのか。くそ生意気なことも言わなくなるだろうな。でも、男らしさのないピエロじゃ、ケンカの相手にならないし。つまんないような気がした。

「それは、一大事件じゃないか。本当に、タマタマを抜き取られるのか？間違いはないのか？」
ピエロは、コクンとうなずいた。「俺は聞いてしまったんだ。先日、時々やってくるウエキとかいうひよっこみみたいな相棒との話を盗み聞きしてしまった。主人が言うには、人間は、タマタマを抜き取れば、おとなしくなって、賢くなるそうだ。昔のチャイナでは、抜き取られた奴が、たくさんいたそうだ。そいつらのことを、えっと、カンガンとか言ってた。結局、遠回しに、俺のタマタマを抜き取れば、おとなしくなる、と言ってるに違いないんだ」

これは大変なことになったと風来坊は、笑顔で千夏と話をしている主人を目を吊り上げてじつとにらみつけた。人間というものは腹黒いという。顔はニコニコしていても、腹では何を考えているか分かったものじゃない。でも、今の話を聞いていると人間の話であって、ピエロのタマタマを抜くとは、言ってなかった。風来坊には、あの笑顔の主人がどうしても悪人には見えなかった。もしかすると、人間世界では、タマタマを抜くことは悪行ではないのかもしれないとも思えたが、カラスの頭では判断がつかねた。

ピエロは、魂を抜き取られたようにバタンと倒れてしまった。倒れたピエロの口から今にも死にかけそうなか細い声が漏れてきた。「もういい。俺は、自殺する。俺は、人間を信じてきた。主人に裏切られた今、何を信じて生きていけばいいのか、わからない。誠心誠意、ご主人様に尽くしてきたのに。こんなむごい仕打ちをされるとは」風来坊は気の毒に思えたが、カラスにはネコを助けるすべがなかった。これ以上慰めを言っても、ピエロを悲しませるだけのよう思えた。

ここまで話を聞いたからには、いざとなれば家出先を探してやることにした。風来坊は頭を前後に動かし力強い声で元気づけた。「落ち込むんじゃない。まず、事実を確かめることが先決だ。話を聞いていると、人間の話であって、ネコの話ではない。本当にピエロのタマタマを抜こうとしているのか、確かめるのだ。いいな、ピエロ。もし、本当だったら、家出するんだ。家出先は、俺が、きっと見つけ出してやる。いっちゃなんだが、愛猫家の家を結構知っている。任せとけ」

話が分かってくれたと思ったピエロは、少し元気が出てきた。身を起こしたピエロは、言われたように事実確認をすることにした。よく思い出してみると、人間の話をしていたが、ネコの話はしていなかった。てっきり、ネコの鳴き声がうるさいから、去勢しておとなしくしようと主人は考えているとピエロは勝手に想像していた。主人を疑った自分が愚かだったような気がし始めた。

プリンをスプーンで口に放り込んだ千夏は、口をもぐもぐさせながらベランダに目をやり千春に声をかけた。「おじいちゃん、見て、白いハト。めったに見ないよね。糸島には、白いハトがいるんだね。でも、ちょっとブッチョクない。それに、くちばしがバカでかい。もしかしたら、アメリカから飛んできたハトかも。おじいちゃん、どう思う？」

千春は、ベランダのテーブルでピエロと仲良く並んでいる白い鳥をじっと見つめた。確かに、白いハトのようだと思ったが、ギンバトにしては体が大きすぎるし、くちばしがバカでかかった。突然変異のハトではないかと思った。「ほう、白いハトのようだけど、ギンバトにしては大きいし、くちばしが特にバカでかい。まあ、突然変異のハトかもしれないね。植物でも動物でも、突然変異ってものがあるんだ。早く言えば、親と全く似ていない子供と言えればいいかな。普通だったら、子供の顔と体型は、親のそれと似るじゃないか。千夏だってお母さんの顔に似てるだろう」

突然変異という言葉が千夏は初めて聞いた。確かに、子供は親に似ている。でも、全く違う子供が生まれることもあるのかと不思議に思った。一度、親の髪は黒なのに、子供の髪はブロンズというのを聞いたことがあった。「そうなの。あのハトは、突然変異か。でも、ちょっとかわいそうね。やはりハトは、かわいくないとね。あのバカでかいくちばしじゃ、かわいくないよ。でも、目が大きくて、賢そうね」

千春もあのハトには知性を感じていた。時々、首をかしげては、何か考えているように思えた。それと、あの鳥が黒かったらカラスに見えるとも思った。もしかしたら、カラスの突然変異とも考えられた。おそらく、こちらのほうが事実じゃないかと思えてきた。鳴き声を聞けば、事実は判明する。ハトは、ククって鳴く。あの鳥もククって鳴くだろうか？もしそう鳴くようだったら、あの鳥は、ハトだ。カ～～、カ～～と鳴けば、カラスということになる。

ピエロと仲良く並んでいるからあの白いハトは、友達に違いないと思った。いつごろから友達になったのだろうかと疑問に思えてきた。「おじいちゃん、あの白いハトは、この別荘に時々来るの？千夏は、初めてあの白いハトを見た。あの白いハトは、人を見ても逃げないのね。普通のハトって、人が近づくと、すぐに飛んで逃げるじゃない。さっき、千夏が、ベランダに行ったんだけど、あの白いハトは、全く驚く様子もなく、じっと千夏の様子を見ていたよ」あの白いハトは、人をじっと観察しているようで、普通のハトではないと思った。

千春は、ますます、あの白い鳥はカラスに思えてきた。カラスは、頭がいい。人を見たからといって、逃げ出さない。じっと、人を観察して、その人の性格を理解しようとしている。一般的に、カラスは頭がいいといわれているが、あの白いカラスは、突然変異で生まれた天才白カラスかもしれない。一回でもいいから、カ～～と鳴けば、すぐにカラスと判別できるのだが、と心でつぶやいた。ベランダの白い鳥は、じっとテーブルの二人の様子をうかがっていた。

「千夏、あの鳥は、なかなか鳴かないね。エサをあげたら、鳴くかもしれない。そうだ、細かくちぎった食パンをあげてみよう」千春は、あの鳥が逃げていかないようにコソ泥のように忍び足でキッチンにかけていった。細かくちぎった食パンを小皿に入れて、さらにゆっくりと忍び足でテーブルに戻ってきた。そして、その小皿を千夏に手渡した。「おじいちゃんがいくと、びっくりして逃げるかもしれない。千夏が、このパンをあげておいで」小さくうなずいた千夏は、小皿を左手に持って、ベランダのガラス戸をそっと開いた。

神妙な顔をして近づいてきた千夏を見て、テーブルのピエロは、首をかしげた。白い鳥は、驚く様子はなく、微動だにしなかった。ちぎられた小さなパンを三個つまみポイっとテーブルに放り投げた。ピエロは、即座に駆け寄りにおいをかいだ。エサではないと判断したピエロは、白い鳥の横に戻ってうつぶせになった。「ハトちゃん、お食べ。パンよ。ちょっと大きすぎるかな」白い鳥は、全く食べようとはしなかった。お腹がすいてないと思った千夏は、そっとガラス戸を閉めてリビングのテーブルに戻ってきた。

テーブルに戻った千夏は、全くエサに反応を見せなかった白い鳥にますます興味がわいた。普通の野鳥だったら、人が近づけば一瞬にして飛んで逃げる。お腹がすいているハトであればエサにがつつく。神社にいるような人慣れしているハトなんかは、エサをもっている人の頭や手に乗ってくる。なのに、あの白い鳥は、人間以上に知的な瞳で、冷静にじっと人を観察している。生まれながらに備わっているであろう本能的な警戒心から逃げようともしない。野鳥でもないし、人懐っこいハトでもない。このような鳥は初めてであった。

「食べなかったね。見向きもしなかったよ。あのハト、パンが嫌いなのかな～～。神社のハトなんか、一斉に集まってきて、我先に喜んで食べるのに。でも、山鳩じゃないと思うよ。人を怖がらないんだもの。スズメなんか、すぐに逃げるじゃない。人を怖がらない野鳥って、いるのかな～～。誰かが飼っているハトだったら、決められたエサしか食べないってこともあるね。おじいちゃん、わかる？」

千春の心の中では、あの鳥はハトではなく、カラスだという思いがますます強くなっていった。あの真っ白い鳥を真っ黒な鳥としてイメージした時、まさに、カラスになるのだった。「おじいちゃんはね、あの鳥はハトじゃないと思う。きっと、カラスだよ。白いから、ハトに見えるだけなんだ。千夏、あの鳥が真っ黒だとイメージしてごらん。カラスになるだろう。大きなくちばしにぶっちよい体型。まさに、カラスだ」

千夏は、あの白い鳥が真っ黒の鳥に変身した姿をイメージしてみた。真っ黒い鳥が頭に浮かび上がると、まさしくカラスの姿だった。千夏はつぶやいた。「あ、カラス」千夏は信じられないという顔で千春に問いかけた。「でも、白いカラスって、いるの？カラスは、黒じゃない。へ～～白いカラスか。もしかして、あの白い鳥って、白鳥の親戚かも。そうだ、動物園から逃げてきたのよ。きっと、そうよ」

千夏の見聞ももつものように聞こえた。もしかしたら、新種の白い鳥で動物園から逃げ出してきたのかもしれない。千春はカラス説に自信がなくなってきた。やはり、決め手は鳴き声だと思った。鳴き声さえ聞くことができれば、即座に、カラスかどうかを判明する。千春はつぶやいた。「鳴いてくれなかな～、あの鳥。カ～と鳴いてくれたら、カラスとわかるんだが。鳴かせる方法はないものか？」

ハトにしてはどうも様子がおかしいと二人は疑い始め始めたと風来坊は感じ取った。もうそろそろ逃げ出さないと素性がばれる恐れがあると察した風来坊は、ピエロに最後の激励の言葉をかけた。「気をしっかり持つんだ。まずは、事実確認だ。家出は、それからでいい。早まるんじやにぞ」元気をなくしたピエロは、涙目でか細い声で返事した。「わかったよ。もし、主人に裏語られたら、伊都タワーから飛び降り自殺して、主人に化けて出てやる。ネコの怨念を思い知らせてやる」

伊都タワーと聞いて、鉄塔の足場で寝転がっていたあの奇妙な老人を思い出した。もう、すでに消え失せていると思ったが、なんとなく気になった。「とにかく、早まるんじやない。俺はもう帰る。素性がばれると、ヤバイからな。そいじゃ、また」風来坊は、何か急に忘れ物を思い出したかのように両手の翼を広げパタパタと羽ばたく音を響かせ、北の方角に飛んで行った。その時、千夏は、あの時、カ～聞こえた鳴き声は、あの白い鳥の鳴き声ではなかったかと一瞬思った。

マスコミ

ピースの家庭でも国会前でのデモが話題になっていた。ネコたちにとっては、誰が政権を取ろうがどうでもいいことだったが、若者の貧困化が深刻になり、ネコやイヌの生活まで貧困化するのではがないかと不安になっていた。能天気なスパイダーまでも約5万人のデモ集団のTV中継を見ては、ワンワンと叫んで飛び跳ねていた。拓実までもスパイダーと一緒に、リビングを走り回り、デモの真似をしていた。

朝食を済ませたアンナ、さやか、亜紀たちは、デモにも大いに関心はあったが、それ以上に、ピースの結婚の話題で盛り上がっていた。まさに夢のような話だが、ピースの結婚が実現しそうになっていた。というのも、ヒフミンは、中学一年生にもかかわらず、三段リーグ全勝の成績でプロになったからだ。史上最年少天才プロ棋士の誕生ということで、日本だけでなく欧米の将棋ファンまでもを熱狂させていた。

プロになったヒフミンは、記者会見で信じられないアホなことを後先考えず口走ってしまった。それは、今後の抱負を聞かれたときに「将来、大好きなネコのピースと結婚します」と公表したのだった。この冗談のような話はバカ受けすると考えたマスコミは、無責任にもこの結婚発言を世界中に発信した。ところが、世界中の愛猫家たちが、何を血迷ったのか、マジに祝福したのだった。もうここまで結婚話が盛り上がってしまうと、結婚プランナー、ホテル、国際観光協会、世界動物愛護協会までも、本気になって結婚実現に乗り出してしまった。

このニュースを知った時、亜紀は、地獄に突き落とされたように落ち込んでしまった。亜紀は、いずれピースとの結婚をあきらめさせようと密かに考えていたからだ。一方、ピースにしてみれば、人間のたわごとなど特段気にしていなかった。ところが、世界中の愛猫家の話題になってしまった今では、嫌が上でもピースはヒフミンと結婚せざるを得なくなってしまった。

愚かにもヒフミンはピースの写真を公開しただけでなく住所までも教えてしまった。そのため、4月に入ってからいろんな雑誌社からの取材申し込みが殺到していた。でも、アンナはいろんな事情を作っては取材を断っていた。いったん取材を受けてしまえば、あることないこと書かれ、ますます結婚せざるを得なくなるようでアンナたちは怖くなっていた。世間ではネコと天才棋士との結婚を面白おかしくとらえて盛り上がっていたが、話題のネコにさせられたピースにとっては、この上ない迷惑だった。

ヒフミンも意外な展開に困惑していた。あくまでもネコのピースが好きということで、ぜひピースを譲ってほしいという気持ちから結婚という言葉をつい口にしたに過ぎなかった。史上最年少天才プロ棋士とネコとの結婚の組み合わせが、ここまで世間をにぎわせ、経済効果をもたらすとは、マスコミも夢にも思っていなかった。N経済総合研究センターによると、世界におけるヒフミン経済効果は、約1000億円に上ると予測された。

頭を抱えた亜紀はさやかに助けを求めた。「どうすればいい。ピースは、世界的大スターになってしまって、逃げ出したくても、逃げ出せなくなってしまったよ。これ以上取材を断れないよ。ヒフミンたら、本当にアホなんだから」さやかもアンナもどうしていいかわからなかった。アンナにしてみれば、エサをちゃんと与えてくれる愛猫家にもらわれるのであれば、別段、結婚に反対する理由はなかったが、当のピースが嫌がっているのであれば、ほっとくわけにもいかなかった。

さやかはヒフミンのことが気に入っていて、結婚には賛成だったが、やはりピースの気持ちを第一に考えるべきだと思った。最近のピースは元気がなく、食事ものどに通らなくなり、やせ始めてきた。今朝も、ほんの少し水を飲んだだけで、病気になったかのようにソファに倒れこんだ。さらにスパイダーまでも、ピースのことが心配になってしまったようで、元気に外で遊ぶこともなくなり、引きこもるようになってしまった。

風来坊は、伊都タワーの奇妙な老人のことが気にはなっていたが、雷山別荘から平原歴史公園に直行してきた。この時間であれば、スパイダーが散歩にやってきているはずだと思い、公園一帯に目を凝らして、上空から亜紀ちゃんとスパイダーを探した。日曜日にもかかわらず、公園で遊んでいる子供は一人もいなかった。しばらく上空を旋回し、伊都タワーに向かおうとしたところ、トボトボと公園に向かって歩いてくる亜紀ちゃんの姿が目にとまった。いつもは、スパイダーも一緒なのだが、今日に限って一人ぼっちで歩いていた。

いつもと違いさみしそうな様子が見受けられた。風来坊は、ちょっとした動きから人間や動物の感情を読み取ることができた。もしかしたら、スパイダーが病気でもして、寝込んでいるのではないかと察した。いつもならば、上空を旋回する風来坊に元気な声で「おはよ～～」とあいさつするのだが、今日はずつむいたままベンチに腰掛けた。ベンチの北側にある楠にフワッと舞い降りたが、ザワザワとする音も耳に入っていないようで、風来坊に振り向くこともなかった。

カラスを見ると「撃ち落としてやる」とわめきたてるクソババ～に嫌味でも言われたのではないかと思い、慰めてあげようとしよぼりとしている亜紀ちゃんに声をかけた。「亜紀ちゃん、元気がないじゃないか。元暴走族のヤンキークソババ～にいじめられたのか。あんなやつのことなんか、気にすることは無い。食べることにしか能がない、いかれポンチのスパイダーは、どうしたんだ。病気でもしたのか？いや、あのパ～プリンクソババ～を怒らせて、ついに、保健所に捨てられたか？」

目の敵にしているアンナへの暴言を聞いているとおかしくなって、笑い出してしまった。風来坊に振り向いた亜紀ちゃんは、笑いながら顔を左右に振った。「そうじゃないの。ピースに大事件が起きたのよ。どうしていいかわからなくて、悩んでいるの」ピースに起きた大事件と聞いて即座に、ピュ～とベンチの背もたれに舞い降りた。「大事件って。ピースが交通事故にでもあったのか？もう年だからな～」

風来坊にピースの身の上に突然降りかかった災難を相談しても、どうにもならないとは思ったが、話だけでも聞いてほしくなった。「失礼なことを言わないでよ。もう老年かもしれないけど、ピースは、交通事故に会うようなドジはしないわよ。それがね。どういばいいか、ピースの縁談のことなの。どうも、ピースは乗り気でないんだけど、一方的な結婚話だけが、トントン拍子に進んじゃって、ピースは、落ち込んでいるの」風来坊は、何度もうなずき、考えをまとめていた。

「ほう、そういうことだったのか。ピースは、血統書付きのクレオパトラ・ネコだからな～。相手は、雑種のブサイクなネコということか。ピースは、フランス育ちだから、ガサツな日本のネコとは馬があいっこないさ。そんなにいやな相手なら、家出すりゃいいんじゃないか。そうだ、雷山にいる男気のあるイケメンを紹介してやってもいいぞ。とにかく、いやだったら、あのクソババ～なんかの言いなりになることはない。善は、急げというじゃないか、今夜にでも家出するがいい」

全く話が通じていないとあきれた亜紀ちゃんは、具体的に話をし始めた。「ちょっと、早とちりしないでよ。家出してことが解決するようなことじゃないの。結婚相手というのが、例の小太りのヒフミンなのよ。あの能天気なヒフミンが、史上最年少プロ棋士になったものだから、ピースとの結婚話まで、世間一般に知れ渡ってしまったの。どこにも、逃げようがないってこと。わかってくれた？」結婚相手が小太りの少年と聞いて、ますます怒りが込み上げてきた。

「なってこった、あの薄汚い小太り少年が、結婚相手だと。もってのほかだ。しかも、ブサイクな人間じゃないか。ネコが人間と結婚することは、キリスト教でも仏教でも禁じられている。なんという神への冒瀆（ぼうとく）。地震よりも恐ろしいことだ。断じて許せん。俺が、成敗してくれる。あの不埒（ふらち）な少年は、どこにいるんだ」風来坊も結婚に反対してくれたことはうれしかったが、カラスが人間を攻撃して解決するようなことではないことを諭すことにした。

。

「そう、むきになっても、解決することじゃないのよ。ヒフミンは、単にピースが好きだけなの。それを、マスコミが大げさに取り上げるから、收拾がつかなくなったのよ。本当に、世間って、怖いね。きっと、近々、取材にやってくるわ。そうなったら、ピースはノイローゼになって、死んじゃうかも。もう、年なんだから。大きな声で質問されて、パチパチと写真を撮られたりしたら、ピースの命は縮まるにきまつてる。もう、どうすりゃいいの」

風来坊はヒフミンを責めたことが浅はかであったことに気づいた。悪いのは、マスコミだと風来坊も思えてきた。人間は、ちょっとしたことでも金儲けに結び付けてしまう。ヒフミンとピースとのことは、世間が騒ぐことじゃない。一人の少年が猫が好きだということではかない。でも、カラスが屁理屈を言ったからといって、人間に太刀打ちできるわけじゃない。とにかく、ピースを救う方法を考えなければと風来坊も両手で頭を抱えた。

風来坊も取材を受けないで済むいい方法はないかしばらく考えたが、名案が浮かばなかった。ちょっと悪質のようだったが、人間の目をくらすには、これしかないと思えた。「亜紀ちゃん、こうなったら。非常手段をとるしかない。死んだことにしよう。これしかない」死んだ、と聞いて一瞬ドキッとしたが、確かに、名案と思えた。「そうね。死んでしまえば、結婚もなくなるし、取材もできなくなる。それって、いいかも」亜紀ちゃんは、ヒョイと立ち上がり、一度うなずき、自宅にかけていった。

ドバッとドアを開き、ポイと靴を脱ぎ捨て、ピョンと廊下に駆け上がり、大きな声で叫んだ。「ママ、さやかおねえちゃん、話があるの」リビングに飛び込むとアンナとさやかは、ソファーにぐったりと横になったピースを挟んで腰掛けていた。「どう、ピースの様子。ちょっと聞いて。今、名案が浮かんだの。ここではなんだから。こっちに来て」亜紀ちゃんは、素早くキッチンテーブルに向かった。

アンナとさやかは、突然のことで顔を見合わせて、目を丸くした。亜紀ちゃんは、早くこっちに来るように招き猫のまねをして、右手の指先をピクピクと動かした。二人がテーブルに着くと亜紀ちゃんは、二人の顔を交互に見つめた。「あのね、取材を断る方法は、これしかないと思う。ピースには、内緒よ。あのね、ピースが死んだことにするの。死んでしまえば、結婚もできないし、取材もできないでしょ。どう？名案じゃない」

アンナもさやかも返事に困った。しばらく、沈黙が続いた。アンナは思った。確かに、死んだことにすれば、結婚話も取材もなくなる。でも、今度は、ピースが死んだことが、世間の話題になってしまう。こうなれば、一生、ピースは家に引きこもらなくてはならなくなる。ピースは納得するだろうか。さやかも嘘をつくことに後ろめたさを感じた。いずれ、嘘はばれる。それが愛猫家たちに知られたら、非難の的になる。

アンナもさやかも、頭を抱えてしまった。さやかが囁くように話し始めた。「嘘は、いずればれるのよ。ピースだって、嘘をつきたくないと思うの。このさい、今は婚約ということで、ヒフミンが名人になれば結婚する、ということでいいんじゃない。それまで亜紀ちゃんがピースを預かるってのは、どうかしら。ヒフミンはやさしくて、ネコのことを第一に思ってくれているから、わかってくれると思う。ピースも、亜紀ちゃんが話して聞かせれば、きっとわかってくれるわよ。どうかしら」

アンナも何度もうなずいていた。嘘は災いのもとと思ったアンナも同意の意見を述べた。「さやかが言うように、嘘は、きっとばれる。そんなことより、ヒフミンを信じてあげよう。ヒフミンだったら、きっと、ピースを幸せにしてくれる。さやかが言うように、ヒフミンが名人になるまでは、亜紀が預かればいい。ヒフミンだって、男よ。納得するわよ」嘘はよくないといわれ亜紀も反省した。ヒフミンを信じてあげられなかったことが恥ずかしくなった。

亜紀は、とにかくピースにヒフミンの良さを話してみることにした。そして、婚約したからといって、このうちを出なくてもいいことを話すことにした。亜紀は、アンナときやかに大きくなずき、返事した。「亜紀が間違っていた。ヒフミンを信じる」そう言い終えた亜紀は、ソファーでぐったりと横になっているピースの横に腰を落とした。「元気を出して、ピース」亜紀はそっとピースを抱きかかえ、二階の自分の部屋に向かった。ベッドに寝かすと、亜紀もピースをいたわるように添い寝した。

亜紀は、ぼんやりと天井を見つめて独り言のように話し始めた。「あのね、ヒフミンってね、本当に能天気なの。そう、小学校四年生の夏休みの時だった。薄汚いランニングシャツを着たヒフミンが、垣根の向こうから、ピース、ピース、って叫ぶの。亜紀がね、ピースを両手で持ち上げて、ここよ～～、って叫ぶと、一心不乱に玄関に突進してきて、ママに挨拶もせずに、ガタガタと階段を駆け上って、亜紀の部屋に飛び込んできたのよ。そしてさ～～、グイっとピースを奪い取って、抱きかかえると、好き好き、ピースって言って、ピースにチュ～～したのよ。ほんと、ヒフミンって、ピースのことが好きなんだな～」

ピースは、耳をピクピクと振るわせ、聞いている様子を示した。亜紀は話を続けた。「そう、ヒフミンってね、勉強はできなかったけれど、将棋が得意でね、だから、プロになるように勧めたの。でも、貧乏だから、あきらめるといって、将棋の駒を捨ててしまったのよ。でも、ピースが王将のネックレスをして、ヒフミンを励ましてあげたじゃない。そうしたら、奇跡が起きて、ついに、ヒフミンったら、プロになったの。それも、史上最年少で。すべて、ピースのおかげだと思う」

亜紀はそっとピースの頭を撫でた。閉じられていた目が、少し開き、亜紀の顔を見つめた。ピースも昔のヒフミンを思い出しているようだった。「ヒフミンはね、いま、大阪の師匠のうちに暮らしているの。必ず、名人になるって、約束してくれたの。名人になって、大金持ちになって、ピースと一緒に暮らしたいって、言ったの。でも、名人になるって、すごく大変なことなのよ。おそらく、後10年でなれるかどうか。もしかしたら、20年先かも。それほど、大変なことなの。でも、ピースのためなら、頑張れるって言ったの。ヒフミンは、ブサイクでも、ヤツパ、男よね」

ヒフミンの気持ちは、ピースもきっとわかってくれると思った。そして、ピースはヒフミンにとっても、亜紀の家族にとっても、かけがえのない存在であることをわかってくれると思った。「ねえ、ピース、ヒフミンが名人になるまで、みんなで応援してあげようか。ヒフミンが名人になるのは、いつになるかはわかんないけど。万が一、ヒフミンが名人になったら、結婚してあげてくれる？それは、ピースの気持ちで決めていいの。もちろん、名人になって、ヒフミンが迎えに来るまでは、ピースは亜紀と一緒によ。どうかしら？」

ピースはか細く小さな呼吸をしていた。ピースは亜紀が思っている以上に年を取っていた。ピースは、毛並みがよくかわいたために、若く見えていたが、亜紀のうちに迷い込んできたときには、人間でいえば、60歳ぐらいいになっていた。また、ピースは、なんとなく自分の寿命を感じ取っていた。ここ1か月くらい前から、原因はわからなかったが、急激に体調が悪くなっていた。だから、ピースの体調が悪いのは、ヒフミンのことが原因ではなかった。必死に慰めてくれる亜紀ちゃんに心配かけて、申し訳ないと思っていた。

ピースは、最後の力を絞り出して、グイっと立ち上がった。そして、亜紀の瞳を見つめると、大きくうなずいた。亜紀は、ピースがわかってくれたと思い、ピースをそっといたわるように抱きしめた。再びピースをベッドに横たえるとお気に入りのピンクのタオルをかけて、おやすみなさい、と言って部屋を出ていった。リビングでは、ソファに腰掛けたアンナとさやかは、不安げな表情で亜紀を待っていた。リビングにやってきた亜紀を見て、アンナは声をかけた。

「ピースの具合はどう？ピースの気持ち、確かめられた？」亜紀は、笑顔を作って、返事した。「わかってくれたみたい。ヒフミンが名人になったら、結婚してもいいって。それまでは、亜紀がピースの面倒を見る。ヒフミンも納得すると思う」アンナとさやかは、ほっとした表情でうなずいた。アンナが厄介な取材のことについて話し始めた。「ピースへの取材なんだけど、ピースは寝込んでるじゃない。だから、ピースの写真撮影は、断りましょう。写真が欲しいといわれれば、アルバムの写真をあげればいいわ」

アンナは、いやいやながら2社のメディアに取材のOKを出した。なるべく近所迷惑にならないように午前と午後一社ずつ取材に応じることにした。翌日の月曜日の朝、10時に甘党茶屋の駐車場にピンクのラパンが停まった。カメラを左肩に担いだ若い女性記者が、アンナの家の玄関に向かって軽やかな足取りで歩いてきた。彼女はドアの前に立つとピンポン、ピンポンとインターホンを響かせ、笑顔を作った。ついにやってきたかとしかめっ面のアンナは、よっこらしよと腰を持ち上げ、重い足取りで玄関に向かった。

踊り場に正座すると声をかけた。「どうぞ、お入りください」開いたドアから24、5歳の女性が顔を出した。「お邪魔します。初めまして、わたくし、愛猫週刊の猫山と申します」とあいさつするとアンナに名刺を手渡した。名刺を一瞥したアンナは、「どうぞ、おあがりください」といってリビングに案内した。カメラを担いだ女性記者は、アンナの後をゆっくり歩いて続いた。キッチンテーブルの席を勧められた彼女は、笑顔で腰掛けた。

テーブルには、亜紀がすでに腰掛けていた。さやかの姿はなかった。さやかは、二階の亜紀の部屋で寝ているピースに付き添っていた。猫山の姿が現れると亜紀は立ち上がり元気な声で「こんにちは」とあいさつをした。お茶を差し出したアンナは猫山の正面に腰掛けた。上品に湯飲みを唇をつけてほんの少しお茶をすすると猫山は口火を切った。「早速で恐縮ですが、ご結婚相手のピースを拝見させていただけますでしょうか？」アンナは、即座に返事しなかった。

言いにくそうな表情でアンナは、小さな声で返事した。「わざわざ、起こしいただいて、申し上げにくのですが、ピースは、ここ一週間ほど具合が悪くて、寝込んでいます。できれば、そっとしておいてあげたいのです。面会は、ご遠慮願いませんか。写真であれば、ここにたくさんありますので、お好きな写真をお持ち帰って結構です」アンナは、ピースのアルバムを猫山の前にさしだした。猫山は、一瞬気落ちしたような表情を見せたが、アルバムを開くと笑顔を見せた。

猫山は、笑顔でアルバムのピースに目を落とすと言葉を発した。「ピースは、体調がよろしくないのですね。それは、ご心配でしょう。期待していた通り、とつても、かわいい美ネコですね。血統書付きのペルシャですね。このレベルのネコは、数少ないと思います。コンクールで賞を取られていませんか？こんなに気品のあるネコが、日本にもいたんですね。お写真を拝見させていただいただけでも、感動いたしました」たとえ社交辞令のお世辞だったとしてもピースをほめてもらい、亜紀は嬉しかった。

「お姉さんもそう思うでしょ。ピースは、チョ～美ネコなの。コンテストで、グランプリをとったかも。ヒフミンが好きになるはずよね」猫山は、美ネコを育てた亜紀に興味をわき、ピースについてのエピソードを聞いてみたくなった。「今まで、これほどまでの最上級の気品とつやのある毛並みは、見たことないわ。亜紀ちゃんが、いつもお世話してるの？グランプリをとったかも、とってたけど、コンテストに出されたことはないの？」亜紀は、返事に詰まった。ピースが庭に迷い込んできた猫だとは言いたくなかった。

嘘はよくないとは思ったが、やはり本当のことは言えなかった。「公園で遊んでいたらね、ネコを抱っこした貴族のようなフランス人が、亜紀に言ったの。帰国するから、このピース、もらってくれる？って。それで、とつてもかわいかったから、もらったの。だから、ピースはフランスでは、有名なネコだったかも。きっと、ピースはフランスで、グランプリをとったと思う。こんなに、毛並みがよくて、気品のあるネコ、ピースだけよ」

猫山は、うなずき日本のネコではないことに納得した。一般家庭がこれほどの気品あるネコを育てたとは思えなかったからだ。トップレベルのネコを育てるには、血統書付きのネコを高額の値段で購入し、栄養バランスを考えた高価な食事を与え、手間とお金のかかる飼育をしなければならなかった。「へ～～、もらわれたの。でも、健康そうで、毛並みもいいから、エサも高級なものを与えられたんでしょうね」

自慢したくなったアンナは突然口をはさんだ。「それはもう。最高級のエサをあげますよ。私たちよりも贅沢させてますから。育ちがいいネコには、いいエサじゃないとだめって、亜紀が言うものだから」猫山は、車庫にベンツが停めてあるのを思い出した。おそらく、ピースを預けたフランス人は、この家庭が金持ちだと知っていたに違いないと思えた。「ところで、ヒフミンとピースの出会いといいますか、馴れ初めを聞かせていただけませんか？」

ヒフミンに関しては、亜紀にしかわからなかったので、アンナは、亜紀に視線を向けた。なんといって切り出しているか、ちょっと迷ったが、小学4年生の夏休みのことを話すことにした。「出会いはね～～、ヒフミンが小学4年生のころだったと思う。家に遊びに来た時、ピースを見て、一目で、気に入ったみたい。そのころから、家に来ては、ピースと遊ぶようになったの。ピースもヒフミンが気に入ったみたいで、ヒフミンに抱かれると、にっこりしてたよ」

猫山は、指先を素早く動かしてスマホにメモをしていた。時々、うなずいては、亜紀の顔を見つめた。「なるほどね。小学四年生の時に、ピースに一目ぼれ。それからお付き合いが始まった。よくある、恋愛パターンだね。ヒフミンの自宅は、近くですか？確か、ヒフミンの故郷は、糸島でしたよね」ニコツと笑顔を作った亜紀は、即座に答えた。「はい、曾根の幹線道路を南に向かって、ここから500メートルほど歩いたところ。オリーブ園があるところ」

猫山は、真剣なまなざしでさらにメモをしていた。ヒョイと顔をアンナのほうにむけると笑顔で話し始めた。「ピースにお会いできないのは、残念ですが、写真をいただけるということであれば、やってきたかいがありました。ヒフミンとピースが、めでたくゴールインできて、幸せになるといいですね。この写真があれば、立派な表紙ができます。5月の愛猫週刊を期待しておいてください。一刻も早く、ピースの体調がよくなるといいですね。それでは失礼いたします」

アンナは、一つ目の苦難を乗り越えることができたことで少しほっとした。できれば、午後の取材を最後に、今後の取材をピースの体調不良を理由に断りたかった。午後に約束した取材は、アニマルウエディングプランナーだった。一部の超資産家たちの中には、猫は神の使者だといって、猫の結婚式にもかかわらず、人間以上の高額な披露宴パーティーを催す愛猫家たちがいた。アンナは、高額な結婚プランを押し付けられるのではないかと不安になっていた。

午後2時過ぎにベントレーが甘党茶屋の駐車場に停車した。次に約束していたアニマルウエディングプランナーではないかと思われたが、営業マンが乗る車にしては似つかわしくなかった。しばらくすると、30歳前後のベージュのスーツを着こなしたファッションモデルのような小顔でスリムな女性が助手席から降りてきた。家の周りと車庫に目をやり、一回うなずいた。彼女は、玄関のインターホンを鳴らし、背筋を伸ばした。「どうぞ、おはいりください」とアンナの返事を聞くと笑顔でドアを開けた。

キッチンに案内された彼女は、席にゆっくりと腰掛けた。警戒心をあらわにした面持ちのアンナは、紅茶をそっと差し出した。そして、見劣りしない美貌のアニマルウエディングプランナーの出現に、アンナは少し対抗心が起きた。あくまでも、ピースの結婚は、ヒフミンがついポロツと口に出したにすぎず、人間のように結婚式を挙げるなどとは、一言も言っていなかった。それなのに、大富豪を相手にしてるアニマルウエディングプランナーが、なぜ、庶民のうちにやってきたのか、不思議でならなかった。

一口すすった彼女は、ブルーのファイルを取り出し、アンナの前に差し出し一枚目を開いた。「こちらが、イラク王族の方が開かれたネコ・ウエディングパーティーのお写真です。いかがですか。ウエディングケーキ、キャンドルサービス、花束贈呈のサービス以外は、オプションとなっております。ウエディングドレスは、約10万円から約1000万円、婚約ネックレスは、約100万円から約1億円、ご自由にお選びください」アンナは、信じられない豪華なウエディングドレスをまとった猫を生まれて初めて目の当たりにした。また、猫の婚約ネックレスなるものを初めて聞かされた。

アンナは、あまりの豪華さに度肝を抜かれ、言葉が出てこなかった。隣の亜紀も目を点にして、ダイヤのネックレスをした猫の写真に見入っていた。我に帰ったアンナは、返事した。「申し訳ないんですが、電話でも申し上げましたように、我が家では、ネコの結婚式を挙げるつもりはありません。しかも、結婚式は、ヒフミンが決めることであって、また、ヒフミンが名人になった暁ということになっているのです。そういうことなので、わざわざ、お越しいただいたのですが、挙式をする予定はありません」

ウエディングプランナーは、全く悲観する様子はなく、平然とした顔で話を続けた。「お相手のヒフミン様には、すでに、了解をいただいております。今回のプランは、婚約パーティーということで執り行わせていただきます。また、無料で致しますので、ご心配はなさらないください」アンナと亜紀は、目を丸くして、顔を見あった。いったい、どういうことなのか、二人にはさっぱりわからなかった。

「どうして、無料で婚約パーティーをしていただけるのですか？信じられません。しかも、大阪の高級ホテルで。夢みたいな話です」彼女は、ちょっと首をかしげた。この婚約パーティーの件は、すでにピース家に伝わっていると思っていた。「婚約パーティーの件は、初めてお聞きになりますか？」アンナは、大きくなずいて即座に答えた。「はい、初めてです。ヒフミンからも婚約パーティーをするなど、一言も聞いていません」

彼女は、意外な展開に面食らった。彼女は上司から婚約パーティーについて次のように聞いていたからだ。ヒフミン様とピース様の婚約パーティーの依頼を桂コーポレーションから受けた。費用は、約1000万。招待客については、将棋界、国際愛猫家協会、愛猫芸能人、愛猫作家、愛猫ミュージシャン、愛猫国会議員、などを招待してほしい。また、ピース家の要望を十分聞き入れること。などなど。

彼女は、一瞬、訪問する家を間違えたのではないかと思った。念のために、確認することにした。「こちらは、ヒフミン様とご結婚なされるピース様のおうちですよ。間違いありませんよね」アンナは、即座にうなずいた。「はい。ヒフミンは亜紀の友達で、ピースは我が家のネコです。でも、婚約パーティーのことは、初耳です」家は間違いなかったことに彼女はほっとした。

胸をなでおろした彼女は、弊社への依頼について説明した。「すでに、桂コーポレーション様より、ヒフミン様とピース様の婚約パーティーの依頼を承っております。特に、ピース様のご意向を十二分に取り入れるようにとのことでした。したがって、費用の請求は、桂コーポレーションにさせていただくことになっています」すでに、契約段階で婚約パーティーの準備資金として、動物の冠婚葬祭会社であるラブラブアニマル社に桂コーポレーションより1000万円が振り込まれていた。

アンナは、しかめっ面になって考え込んだ。いったいなぜ、多額の費用をかけてヒフミンとピースの婚約パーティーをするのか？どのようなメリットがあるのか？会長は、ヒフミンを将来何かに利用しようとしているのではないか。お金儲けしか考えない会長が、慈善行為をするはずがない。何か、あると思ったが、アンナには、どう対処していいかわからなかった。

「桂コーポレーションからの依頼ですか。でも、そのようなご厚意を受けるいわれはありません。また、ピースの体調も芳しくありません。ここ数日、寝込んでいる状態なのです。パーティーだなんて。誠に申し訳ありませんが、婚約パーティーの開催はご遠慮したい、と桂コーポレーション様にお伝え願えませんでしょうか」彼女は、困った顔で黙り込んだ。すでに1000万円が振り込まれている大口契約なので、引き下がってしまうと上司に大目玉を食らうとおびえた。

なんといっぴて話を繋げようかと思案したが、ピースの安否を気遣うことが先決と考えた。「ピース様は、そんなに容体が悪いんですか。寝込むほどであれば、当然、パーティーは無理ですね。何か、いい方法はないものでしょうか？やはり、無理でしょうか。不謹慎ですよ。ご病気だというのに、パーティーだなんて。困ったな〜。どう報告すればいいか。あ〜、どうしよう」

困り果てた様子の彼女にアンナは、困惑した。パーティーを断ったからといっぴて、何か困ったことでもあるのかと不思議だった。「ヒフミンのことであれば、こちらから、説明します。ピースの具合が悪いといえは、納得するはずです。そんなに、心配なさらないでください。あ、桂コーポレーションへの断りであれば、心配ありません。アンナが、そう言っていたとおっしやっていただければ、会長もわかつてくれるはずです」

彼女は、苦渋の選択を迫られているような深刻な顔でうつむいていた。彼女は、顔をふいに持ち上げるとつぶやいた。「それでは、お体がよくなればたら、パーティーを開催することにいたしましょう。これだつたら、問題ありませんか。桂コーポレーション様のせつかくのご厚意ですから。いかがですか」かなりしつこいセールスレディーとイラツときたが、必死に食い下がる彼女の悲壮な表情を見ているとなんとなく気の毒に感じてきた。

アンナは、しばらく考えていた。婚約パーティーなどは、不必要だが、ピースの快気祝いであれば、ヒフミンもピースも喜ぶ。この奇妙な会長の慈善行為に、すこし、裏があるような気もするが、楽しいことであれば、あまり深刻に考えなくてもいいのでは。ピースが元気になることを祈願して、パーティーを準備するのもいい。このままだと、ピースの容体が、ますます悪くなるような、いやな予感が頭をよぎつた。

アンナは、大きくなずいた。「婚約パーティーなんて、大げさだけど、桂コーポレーション様のご厚意に甘えます。きっと、ピースは喜ぶと思います。ピースが元気になったら、婚約パーティー、お願いします。桂コーポレーション様に、いつもご支援いただき、感謝の言葉もありません、とよろしくお伝えください」彼女は、この言葉を聞いて、上司のカミナリを回避できたとホッとした。でも、良家の育ちには見えないヤンキー系のアンナという女性は、桂コーポレーション様とどういう関係にあるのだろうと不思議に思った。

「よかった。ピース様は、きっと元気になられますよ。体調がよくなられたら、お知らせ願えますか。私どもも、心から健康の回復をお祈りいたします。桂コーポレーション様には、ピース様のご容体を知らせ、ご健康が回復なされ次第、婚約パーティーを開催する旨をお伝えいたします。ピース様にお目にかかれないのが、残念ですが、よろしくお伝えください。それでは、失礼いたします」

告知

ウエディングプランナーが消え去るとアンナは、ホッとしたが、ピースの容体のことを思うと胸が苦しくなった。ピースは、ここ数日元気がない。いつになったら、元気になるのだろうかと気が気ではなかった。亜紀もピースの容体が心配でならなかった。病院で精密検査を受けたほうがいいのではないかと思った。「ママ、ピースは、なんかの病気じゃない。一度、精密検査してもらったら」

アンナもかかりつけの動物病院での検査を考えていた。不安げな顔つきで亜紀に声をかけた。「亜紀、ここ数日寝込んでいるけど、ピースの容体はよくなっているようじゃないわね。手遅れにならないうちに、見てもらったほうがいいみたい。早速、かかりつけの病院に、検査予約するわ」亜紀も大きくなずいた。「あんなに元気がないピースは、初めて。一刻も早く、病院に連れて行ってあげようよ」

アンナは、スマホを左手にとるとかかりつけの病院に電話した。亜紀は、二階に駆け上がっていった。二階のベッドでは、ピースが気絶したかのようにぐっすり寝ていた。さやかは、ピースを見守るように添い寝していた。「お姉ちゃん、ピース、大丈夫かな〜。いま、ママが、病院に電話してる。すぐに、検査したほうがいいって」さやかも一刻も早く、病院で診てもらったほうがいいと思っていた。

検査予約が取れたアンナは、亜紀とさやかに声をかけ、三人は駐車場に向かった。アンナが運転席に腰掛けるとピースを抱きかかえた亜紀を後部座席に座らせ、さやかを助手席に座らせるた。アクセルが踏み込まれたベンツS550は、キュキュ〜と後輪を空回りさせ、救急車のごとく病院に突進していった。そして、伊都動物病院に緊急搬入されたピースは、1日の検査入院をすることになり、検査結果の説明は、翌日の午後2時になされることになった。ピースを残して帰るのは、とても寂しかったが、三人は、病気でないことを祈って帰宅した。

17日（火）3人を乗せたベントは約束の20分前に病院の前にある駐車場に到着したが、アンナはすぐに車から降りようとしなかった。さやかも亜紀もアンナの動作に合わせて車から降りようとしなかった。アンナが不安を打ち明けた。「大丈夫よね。きっと元気になる。そうよね」助手席のさやかが返事した。「大丈夫よ。神様を信じよう」さやかの真後ろの後部座席に腰掛けていた亜紀が、言葉を付け足した。「きっと、神様がピースを守ってくれる」

午後1時55分前に車から降りた3人は、玄関の自動ドアを開いた。面談室に案内された3人は、主治医がやってくるのを静かに待った。2時をほんの少し過ぎたころ面談室のドアが開いた。そして、丸顔のやさしそうな主治医が神妙な顔で入ってきた。パソコンが置かれたデスクに腰掛けた主治医は、説明を始めた。「昨日、MRI、CT、心電図、眼底、血液、尿、などの検査を行い、今朝、レントゲン検査も行いました」

三人は、固唾（かたず）をのんで検査結果をまった。先生は、ちょっと間を取った。「ピースは、ネコでは、12歳ですが、人間では、65歳ぐらいに当たります。これはあくまでも目安です。元気なネコですと、人間でいえば、100歳ぐらい長生きするネコもいます。でも、人間と同じように、ネコも病気をします。病気にも、治るものもあれば、治らないものもあります。

なんといっても、人間にとって一番怖い病気は、ガンです。そのガンは、人間だけでなく、ネコにもあります。特に、シャムは、悪性リンパ腫にかかる場合が多いのです。決して不治の病ではないのですが、治りにくい病気ではあります」主治医の話が、途切れた。小さくうなずくと話を続けた。申し訳なさそうな表情で告げた。「検査の結果、ピースは、終末期の悪性リンパ腫です」

三人は、悪性リンパ腫という初めて聞く病名に戸惑ったが、なんとなくガンであることは察知できた。アンナは、恐る恐る確認した。「先生、その病気は、治るんですか？治す薬はあるんですか？」主治医は、ゆっくり答えた。「残念ですが、おそらく、余命三日というところです。奇跡を信じるしかありません。薬はありますが、ピースを苦しめるだけで、命が助かる保証はありません」

最悪の結果を聞かされた三人は、呆然とし、言葉が出てこなかった。主治医は、飼い主の気持ちを察し、話を続けた。「ご自宅でも入院でも、栄養剤、痛み止めを打つことができますが、どのようになされますか？もし、容体をお知らせなされたい方があれば、早めになされたほうがいいかと思います。突然の病状の悪化は、考えられますので」

しばらく、三人に沈黙が流れた。余命三日という言葉はどう受け入れればいいのか心が混乱していた。アンナがピースの最期のことを考え、気持ちを述べた。「最期は、自宅で看取りたいと思います。ピースを愛してくれた仲間ともお別れをさせてあげたいと思います。さやか、亜紀、二人はどう思う？」さやかも亜紀もうなずいた。亜紀が息を詰まらせて話し始めた。「ピースをおうちに帰らせてあげたい。スパイダーも心配してるし」

主治医も自宅で最期を看取ることに賛成した。「ピースは、皆さんに愛されて幸せですね。ご自宅で最期の時間をお過ごしください」主治医は、そう吊いの言葉を残し、静かにドアを開けて部屋を出ていった。亜紀は、ぐっすり寝込んだピースを抱きかかえ自宅に帰った。亜紀は、ゆっくり階段を上がり、ピースの部屋に入った。そして、ピースのためにオーダーメイドで作られたピース専用のベッドにそっと寝かせ、白地に真っ赤なバラがプリントされたタオルをかけた。

さようなら

ピースを寝かせると三人は、キッチンテーブルに集まった。今後のことを話し合うことにした。アンナが、話し始めた。「ピースの命は、20日の金曜日まで。このことをヒフミンに知らせるべきだと思う？二人はどう思う？」まず、亜紀が答えた。「ヒフミンの結婚相手でしょ。知らせなくっちゃ」次に、さやかが答えた。「ピースは、家族の一員じゃない。できる限りの多くの仲間たちに、知らせてあげましょう」

アンナもさやかの意見に賛成だった。「そうよね、鳥羽君にも、桂会長にも知らせましょう」亜紀が話をつないだ。「それに、スパイダー、秀樹君、風来坊、ひろ子お姉ちゃん、ゆう子お姉ちゃん、それと～」さやかがさらにつけくわえた。「安部教授、篠田校長、伊達刑事、沢富刑事、お菊さん」それぞれ思いつく仲間を述べた。アンナが、締めくくった。「涙を流していたんじゃない。みんなでピースを天国に見送ってあげなくっちゃ。各自、思いついた仲間に連絡してちょうだい。いい」

突然、アンナの顔に不安げな影が差した。「二人とも、仲間に知らせるのは、ピースがなくなってからにして。ヒフミンは別だけど。ピースにとって一番大切な人は、ヒフミン。ピースは、ヒフミンとの静かな別れを望んでるはず。ママが、ヒフミンに知らせる。今は、二人とも、ピースの容体について、誰にもしゃべっちゃダメ、いい」二人は、うなずいた。

アンナは、その日の夕方、ヒフミン宛に「ピース、キトク」とだけの電報を送った。その電報を受け取ったヒフミンは、即座に電話してきた。「もしもし、アンナさん。電報受け取りました。どういことですか？」アンナは、回りくどい話をして、逆に、ヒフミンを不安がらせると思い、単刀直入に答えた。「ヒフミンは、男でしょ。腹をくくって聞くのよ。ピースの命は、後三日。このことは、ヒフミンしか知らせない。これは、ピースの気持ちだと思うから」

しばらく、沈黙が続いた。ヒフミンの顔から血の気が引いていた。気持ちを落ち着かせたヒフミンは、やっと言葉を出した。「三日ですか、どうにもならないんですか？手術とか、薬とか？アンナさん」アンナの目から涙がこぼれていた。「ピースは、悪性リンパ腫という病気なの。しかも、終末期の・・・天命を受け入れる意外なのよ。だからといって、動揺しちゃダメ。ヒフミンのピースへの思いは、将棋で勝つことよ。わかる。つらいと思うけど。対局で勝って、ピースを天国に見送ってあげて」

ヒフミンには、これ以上の言葉は出てこなかった。「わかりました。ピースをお願いします。ありがとうございました」呆然となったヒフミンは、力なく電話を切った。アンナは、ちょっと不安になった。ピースの危篤を知って、試合に負けてしまうのではないかと。ヒフミンは、明日に対局を控えていたが、頭の中は真っ白になっていた。現在、ヒフミンは、破竹の勢いで竜王戦の予選を勝ち抜いていた。本戦に向けて、あと一步のところまで来ていた。

ヒフミンは、心を落ち着かせ考えた。”あと三日の命ということは、命は金曜日まで”ということだ。明日、水曜日のNHK杯予選の対局は、キャンセルできない。でも、木曜日の竜王戦予選の対局は、不戦敗にできる。おじいちゃんが危篤といって、明日の対局後、すぐに、伊丹空港から、飛行機で糸島に帰ろう。水曜日の夜には到着できる。きっと、間に合う。それまで、ピース、生きていてくれ。

しかし、竜王戦予選の大切な対局を不戦敗していいものか。もし、嘘が発覚すれば、師匠から破門されるかもしれない。師匠には、正直に話し、承諾を得なければならぬ。もう、俺はプロだ。とにかく、師匠に本当のことを言って、糸島行きを許してもらおう。翌日の対局は、いつもの棒銀戦法で苦戦を強いられたが、かろうじて、勝利した。対局後、ピースの危篤のことを話すために、自宅に飛んで帰った。

和室の書斎で師匠の阿保田三吉（あほださんきち）は、ヨガの胡坐（あぐら）で、瞑想にふけていた。書斎に入ってきたヒフミンの足音には気づいていたが、黙って瞑想を続けていた。ヒフミンは、丸眼鏡を鼻にちょこんと載せた師匠の前に突っ立つと大きな声で呼びかけた。「師匠、お話があります」瞑想をぶち壊しやがって、と内心腹を立てたが、師匠は、静かに目を開いた。「何だ。今は、瞑想中だ。後にしろ」

ヒフミンは、即座に返事した。「急用です。緊急事態です。一刻の猶予もないんです」師匠は、何事かと思い、目を開いた。「何事だ。緊急事態とは？」師匠の真ん前に正座したヒフミンは、マジな顔で答えた。「ピースが、危篤です。すぐに、糸島に帰らせてください。お願いします」危篤と聞いた師匠は、尋ねた。「ピースとは、誰だ。家族か？」ヒフミンは、即座に返事した。「婚約者です。一刻の猶予もないんです。後、二日の命なんです。お願いします、帰らせてください」

中学一年生で婚約者。師匠は、腑に落ちなかった。「危篤であれば、一大事だと思ったが、ピースという名に疑問を感じた。そのピースとかいう方は、昔でよく言う、いい名づけというやつか。ピースは、あだ名か？」ヒフミンは、ピースは、猫であることを言っていないことに気づいた。「すみません。ピースは、ネコです。でも、人間と変わらないんです。小学生のころから、大好きだったんです。今から、すぐに、帰らせてください」

ピースは、猫の名前と聞いて、あつけにとられた。あまりにも真剣に話すから、バカにするのも気が引けてしまった。とにかく愚かな考えをやさしくとがめることにした。「まあ、大好きなネコが危篤であれば、一大事だ。でもな～、お前は、プロ棋士だ。プロ棋士というものは、親が危篤の時でも、悲しみに耐えて、対局をしなければならん。ネコが人間に劣るとは言わんが、ネコが危篤だからといって、不戦敗を認めるわけにはいかん。いいな」

しばらくヒフミンは、黙ってうつむいていた。「師匠、僕にとって、ピースは、親よりも大切なんです。もし、ピースがいなかったら、プロへの道をあきらめていたんです。ピースの励ましのおかげで、プロになれたのです。だから、ピースは、命の恩人以上なんです。最期に、お礼を言いたいのです。わかってください、師匠」真剣なまなざしのヒフミンの言葉に、嘘はないように思えた。

だからといって、猫が危篤だからといって、不戦敗を認めてしまえば、師匠として、将棋連盟へ顔向けができない。また、師匠として失格の烙印を押されかねない。師匠は、ヒフミンの気持ちを大切にしていたが、判断がつかかぬ。何かいい方法はないものかと頭をひねった。腕組みをした師匠は、首をかしげて、ウ～～となり、「困った、困った」とつぶやいた。

ヒフミンも必死だった。師匠の顔を立てて、不戦敗にする方法はないか、考えた。「師匠、もしかしたら、僕、ガンかもしれません。どうも最近、体の具合がおかしいんです。検査入院させてください」もう一度、師匠はウ～～とうなった。急性盲腸ということもある。検査入院であれば、だれにも疑われない。みすみす竜王戦を棒に振ることになるが、長い目で見れば、大したことじゃない。師匠は、腹をくくった。

「よし、行って来い。命の恩人、いや、命の恩ネコ、に最期の感謝を述べて来い。すぐに、タクシーを呼んでやる」すっと立ち上がった師匠は、お仏壇に向かった。正座した師匠は、お釈迦様に手を合わせた。そして、心でつぶやいた。”アホな師匠をお許してください。弟子の思いをかなえてあげたいのです。すみません”腹巻に押し込んでいたへそくり財布から、3万円を抜きとった師匠は、「花でも買ってやれ」と言って手渡した。あまりの嬉しさにヒフミンは、師匠に飛びつき抱きしめた。幸運にも伊丹空港からキャンセル待ちで午後8時15分の福岡行の便に乗ることができた。

タイミングよく座席が空いたことは、神のご加護だと感謝した。ヒフミンが窓際の席に着くとすぐに通路側の席に30歳前後のグレイの背広を着たサラリーマン風の男性が腰かけた。彼は、時々、チラチラとヒフミンの顔を見ていた。彼は将棋ジャーナルの記者で、明日、二日市温泉で行われる王位戦第三局の取材のために福岡に向かっていて、彼は、天才棋士ヒフミンではないかと確かめていた。なぜ、この時間に福岡行の飛行機に乗っているのか不思議に思った。

ヒフミンは、窓から見える夜空をスクリーンに白いピースのかわいい笑顔を思い浮かべていた。離陸してシートベルトを外した時、男性は、ヒフミンに声をかけた。「もしかして、ヒフミンさんでは、ありませんか？」ヒフミンは、一瞬凍り付いた。天才棋士としてもてはやされていたヒフミンは、いつもならば、笑顔でハイと返事するところだったが、福岡への逃避行は、誰にも知られたくなかった。しかし、棋士の顔をほとんど記憶している記者に対して、違いますとは答えられなかった。

小さくヒフミンは、うなずいた。「はい。おじいちゃんが、危篤なんです。だから」危篤と聞いた記者は、納得した。「そうでしたが、大変ですね。私、将棋ジャーナルの口先銀次（くちさきぎんじ）と申します。確か、明日は、竜王戦予選の対局でしょ。とんぼ返りってことですか。でも、天才ヒフミンさんであれば、予選は、難なく突破ですね。将棋ファンは、中学生竜王を期待しています。頑張ってください」

気まずくなったヒフミンは、とにかく話を合わせることにした。「はい。頑張ります」ヒフミンは、大人と話すのは苦手だった。できれば、話しかけないでほしかった。即座に目を閉じ、うつむいたヒフミンは、タヌキ寝入りをすることにした。男性は、疲れて寝入ったと思い、少年を寝かせてあげることにした。しばらく、口先はヒフミンの寝顔を見ていたが、この出会いは神様が与えてくれたプレゼントではないかと勝手に思い込んだ。

そして、もし、天才少年棋士のAIを凌駕する読みを記事にできれば、一躍有名になり、一気に出世できるのではないかとよこしまな思いを起こしてしまった。口先は、左手の人差し指をピンと伸ばし、ヒフミンの左肩をチョンチョン突ついた。タヌキ寝入りのヒフミンは、いやな奴に見つかったものだと心でつぶやいたが、頭を起こし、瞼を開き、左横の記者に顔を向けた。ニヤッと笑顔を見せた口先は、囁くように言葉をかけた。

「睡眠中、申し訳ありません。ちょっと、質問よろしいでしょうか？」今は、誰とも話したくなかったが、むげに断って、福岡への夜間逃避行を記事にされては困ると思い、ちょっと笑顔を作って、返事した。「はあ、何でしょう？」急に真剣な表情になった口先は、ギョロ目で質問した。「将棋ファンなら、誰も思っていることなのですが、ヒフミンさんのヨミは、AI以上です。この天才的ヨミは、どこから来るものですか？できれば、凡人にもわかるように話してもらえないでしょうか？」

最も答えにくい質問をしてきたと思い、しばらく返事を考えた。自分にもわかりませんと答えれば、天才少年棋士は生意気だなどと噂されて、多くの記者たちを敵に回すだろうし。それかといって、僕は生まれながらにして、将棋の天才です、では答えになってない。僕は、国語が苦手で、説明ができないんです、っていうのも私はバカですとっているようだし。こういう時に、亜紀ちゃんがいてくれたら、相談できるんだが。その時、脳裏にある将棋盤がピースの笑顔に変わった。

ニコッと笑顔を作ったヒフミンは、答えた。「わかっていただけるかどうか、わかりませんが、実を言うとですね」口先の目が、キラキラと輝き始めた。口先は、次の言葉をじっと待った。「僕は、1分ぐらいで、100手ほど読むんですが、どう読んでも勝ち目がないような時があるんです。もう駄目だ、このままだと負けてしまうって思うんですよね」口先は、ヒフミンの顔をじっと見つめていた。

「もう負けてしまう。それで」口先は、話を促した。「その時なんです。暗闇の中でピカッと二つの目が輝くのです。そうすると、ドカ〜と宇宙を切り裂くようなイナズマとともに、今まで思いつかなかったヨミが現れるのです」顔を紅潮させた口先は、尋ねた。「その二つの目というのは、誰の目ですか？」ヒフミンは、恥ずかしそうな表情で答えた。「真っ白なネコの目なんです」

口先の緊張の糸が、ぷつんと切れた。でも、話としては、面白いから記事になるような気がした。「つまり、ヒフミンの天才的ヨミは、白いネコのおかげということですね。その白いネコというのは、ピースでしょ」思いっきり笑顔を作ったヒフミンは、答えた。「正解。チュ〜チュ〜したいほど大好きな、ピースです」心では、あほらしいと思ったが、天才というものは、こういうものかと思ひ、苦笑いした。「凡人にも、よくわかりました。この話を聞けば、将棋ファンは、きっと喜ぶます。今後の活躍を期待しています」記者の頭の中で、しらけ鳥が飛んでいた。

約80分のフライトで福岡空港に到着した。着陸のアナウンスが耳に入るとヒフミンは、あわててシートベルトを締めた。席を立つ時、励ましてくれた記者と握手を交わし、タラップを降りると到着ロビーを全速力で通過し、タクシー乗り場に突進していった。運良く、タクシーを待っている人は一人もいなかった。先頭のAIカラオケタクシーに近づくとドアが開いた。飛び乗ったヒフミンは、一言告げた。「糸島の平原歴史公園に行ってください」チャットちゃんは、元気よく返事した。「はい、かしこまりました」そして、ゆっくりと運転手の椅子が回転した。そこには、ひろ子の顔があった。

「あら、小太り坊やじゃない。いったい、今頃何してるの。子供の夜遊びはだめよ。プロだからといっても、まだ、中学生でしょ」せつかくの幸運もここまでかとしかめっ面になった。「何言ってるんですか。夜遊びなんかじゃ、ありません。とにかく、平原歴史公園に行ってください。亜紀ちゃんのおうちに。いやな奴」ひろ子には9時過ぎに空港にいたことが理解できなかった。

「亜紀ちゃんのおうちね。チャットちゃん、亜紀ちゃんのおうちにだってよ。いったい何を考えているのやら。亜紀ちゃんのおうちに、何の用事なの。もう、夜よ。なにがあったのよ」ピースの危篤のことを話そうかと思ったが、少しためらった。でも、ひろ子さんは、ピースをかわいがってくれていた。「実をいうと、ピースが危篤なんです。だから、会いに行ってるんです」

ピースが危篤と聞いて驚いたが、もっと驚いたことは、ヒフミンが大阪から福岡にやってきたことだった。目を丸くしたひろ子は、尋ねた。「っていうことは、ピースが危篤と知って、大阪から、今、やってきたってこと」ヒフミンは、うなずいた。「余命二日なんだ。一刻も早く、会わないと。ピースが活着しているうちに、お礼を言いたいんだ。プロになれたのは、ピースのおかげなんだ」

AIカラオケタクシーは空港通インターに乗り上げると糸島に向かっていた。余命二日と聞いて、ひろ子は不安になった。到着した時には、亡くなっているかもしれない。ピースが活着していることを祈った。「そうだったの。ピースはヒフミンの人生を変えた大切なネコだったのね。ピースもヒフミンに会えば、きっと、元気が出るわ」ひろ子は、ヒフミンがピースが活着しているうちに再会できるように手を合わせて神に祈った。

甘党茶屋の駐車場にAIカラオケタクシーが到着しするとヒフミンは飛び降りた。そして、明かりが見える亜紀のうちに一直線にかけていった。インターホンを鳴らさずに、自宅に帰ったごとく、ドアを勢い良く開き、スリッパも履かず、廊下をにかけていった。人影のないリビングを確認すると、ドタドタと階段を駆け上がった。三人は、聞きなれた足音にまさかヒフミンと思った。傍若無人の足音は、何度も聞いたことのあるヒフミンの足音だったからだ。

ヒフミンは、亜紀の部屋をのぞき、すぐに、ピースの部屋のドアを開いた。ヒフミンの顔を見たアンナは、飛び上がって歓迎した。「ヒフミン、来てくれたの。ピースは、ここよ。眠ってるわ」ヒフミンは、ぐっすり寝ているピースに駆け寄った。そしてつぶやいた。「元気を出すんだ。ピース。僕は、ついに史上最年少のプロ棋士になった。すべて、ピースのおかげだ。名人になるまで、生きていてくれ。ピース」

ピースは、ヒフミンの声を判別したようだった。ほんの少し目を開いた。そして、しっぽを左右に振った。それを見た亜紀が叫んだ。「しっぽを振った。ピースは、ヒフミンがここにいるのをわかったのよ。ピース、ヒフミンよ。大阪から、ピースに会いに来たの。よかったね。ピース」さやかもピースに声をかけた。「ヒフミンよ。ピースのおかげで、立派なプロになれたの。ヒフミンのプロの顔を見てあげて」

ピースの目が一瞬開いたが、即座に閉じられた。そして、亜紀には、ピースの体がぴかっと光ったように見えた。今、天国に行ったのではないかと直感した。まさかとは思ったが、おなかに手を当てた。鼓動は消えていた。「ママ、ピースが・・・」亜紀の目から涙が流れ落ちた。ピースは、痛みと引き換えに、ヒフミンに会えるまで天国行きの列車に乗るのを拒んでいた。別れを告げたピースは、今、未知なるエネルギーとなって無限の宇宙に旅立った。

ヒフミンは、ピースの死を認めたくなくて、じっと耐えていたが、涙がこぼれ落ちた。アンナは、ヒフミンを慰める言葉が見つからなかった。その代わりに、ピースの言葉を代弁することにした。「ピースは、ヒフミンに言いたかったと思う。名人になって、結婚してって。だから、ピースのために、どんなことがあっても、名人になるのよ。泣いてる場合じゃない。明日、朝の飛行機に乗って、帰りなさい。そして、必ず勝つよ。ピースのために。いい」ヒフミンは、小さくうなずいた。

木曜日の朝、7時ごろ、風来坊は、平原歴史公園の上空を巡回していた。亜紀の家の玄関から小太りの少年が出てくるを発見した。その少年は、アンナ、さやか、亜紀に向かってお辞儀をして、AIカラオケタクシーに乗り込んだ。そのタクシーは、国道202バイパスに向かって走っていった。風来坊は、ピースのことが心配で、カ〜、カ〜と亜紀に呼びかけた。亜紀は、上空を見上げ風来坊に手を振って合図した。朝食を終えた亜紀は、公園にかけていった。

公園のベンチの背もたれにとまって、風来坊は亜紀がやってくるのを待っていた。息を切らせて走ってきた亜紀は、風来坊に声をかけた。「昨夜ね、ヒフミンが、大阪からピースに会いに来たの。ピースは、喜んでいたわ。とっても幸せそうだった。笑顔でみんなに別れを告げると、天国に向かったわ」ピースの死を感じ取った風来坊は、何も言わず、ピースを追いかけるように青空に飛び立った。

風来坊は、いつものように伊都タワーで休憩することにした。今朝は、日曜日の奇妙な動物の先着はいなかった。鉄棒にふわっと飛び降りて、眼下に広がる糸島オリーブ園を眺めた。突然、風来坊の耳にオリーブ園方面から、ニャ〜ニャ〜とお腹を空かした子猫の泣き声がかすかに聞こえてきた。これは一大事と、風来坊は、オリーブ園の上空を巡回した。すると、必死に母親を探しているような真っ白な子猫が、目に飛び込んできた。